雜報

●新星發見　ハアヴアト天文臺のウツ女史は、此程、古い天體寫眞板上に新星を發見した。寫眞は一九〇二年十一月十九日の撮影のものに、七等星として寫つてゐるので其の位置は赤經八時九分三六秒、赤緯南二六度一六分(一九〇〇年の春分點)又、銀經は二一四度、銀緯は北六度である。此の星は十七日間ほど、同じくらゐの光度を保つた後、漸次減光し、一九〇三年六月三日には十等半となり一九〇五年には十四等半以下となつて了つた

一九〇二年十一月十九日以前は寫眞が撮つてないので星の事情はよくわからないが前月二十四日の寫眞で見ると、少くとも十等三以下でなければならない。又、一九〇一年の寫眞には十六等の星が寫つてあるのに、此の星は見當らない。新星のスペクトルは撮つてない。此の星は艫座新星と名付けられる。

近頃一九二一年十一月二十四日にメトカーフの十六吋で撮つた寫眞では十五等以上に此の星は見當らない。だから此の星は少なくとも八等級減光した筈である。

●北冠R型の一新變光星　此冠座R星と牡牛座SU星と、射手座RY星とは、變光が甚だ不規則な點　特に一種類をなし、多くの觀測者を惱ましてゐるが此程、南半球の諸所に於ける寫眞觀測などによつて、風鳥座S星も亦此の種の變光星だと知れた。此の星の位置は(一九〇〇年)

赤經一四時五九分　赤緯南七一度四〇分

で、一八九四年ハアヴアドで發見したもの、スペクトルは、他の三つが皆G即ち太陽型であるのに、此のS星はR3である。又、光度は平常十等級であるが、何時となく、一三・四等まで降る。最近此の星が極小になつたのは一九一九年の十月から十一月へかけての時であつた。

●セフエウス座U星の週期　此の星はアルゴール型の變光星で、北極に近いため北半球では觀測し易い星であるが、一九〇三年、チヤンドラア氏は十九世紀始め頃からの觀測を整理して、變光週期を二・四九二八七六一日と得た。其の後、ウエンデル氏がハアヴアド天文臺で行つた觀測から、シヤプレイ夫人は研究の結果、此の星が一九〇五年頃、急に二秒ほど週期が長くなつたことを發表しドウガン氏も亦此の週期延長の事實を確めたのは一昨年のことである。近頃、カンベル氏の觀測によれば此の星が昨年十二月三十日一三時十二分(綠威時)に極小になつたとのことで、之れで計算し　見ると現今は週期が二・四九二九〇一日である。とのことで、之れを用ゐれば一九〇五年以後の觀測は全部完全に說明が出來る。しかるに此の星が一八八〇年初めて變光星だと發表されて以來、別に漸進的に週期が變化したやうな形跡は見えない。尤も何分といふ程度の調和變動があるらしくはあるが。兎に角、アルゴール型の變光星といへば、其の變光が星の機械的運動から起ることが確かめられた可なり安定らしい星であるのに、それでも此の種の變化が突然として起るといふことは不思議なことと言はねばならぬ。變光星は何れの星でも油斷はならない

●彗星發見　最近報によれば、去る一月二十日の夜、南アフリカの喜望峰天文臺に於いて、一彗星が發見された。發見者は不明。同月二十四日に於ける其の位置は

赤經九時四分三一秒　赤緯南三度四七分

であるが、其後、米國エルケス天文臺のハアナアド教授が寫眞觀測を試みたところによると、二月四日には

赤經九時四三分五八秒　赤緯南三度〇三分

であり、光度は十等乃至十一等であるといふ之れで見ると、此の星は當時ポンプ座を西南へ向け運行してゐたのであるが、其の後第三回目の觀測が未着だし、軌道要素も不明で、今日の位置はわからない。